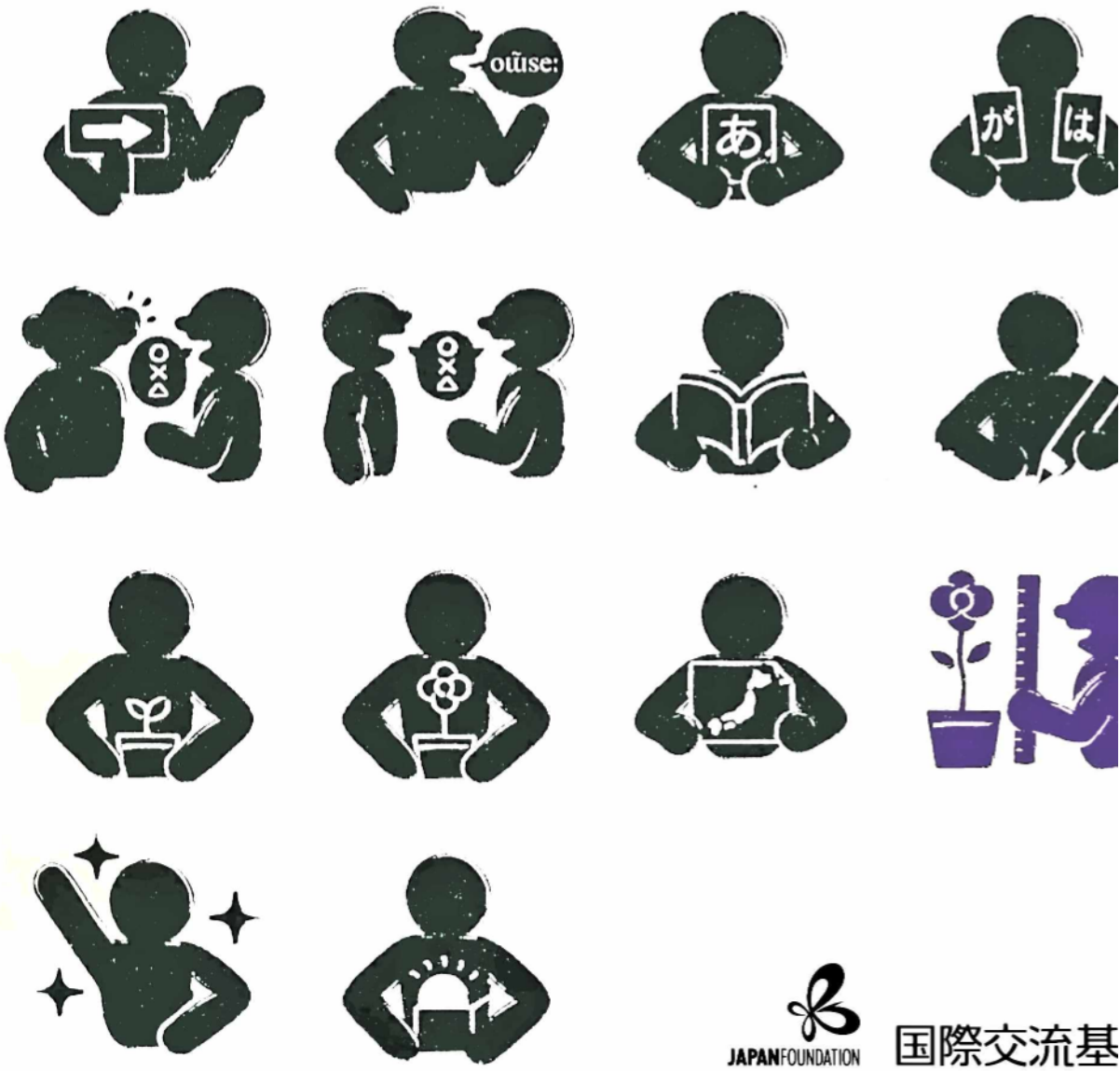
国際交流基金 日本語教授法シリーズ 12

学習を評価する



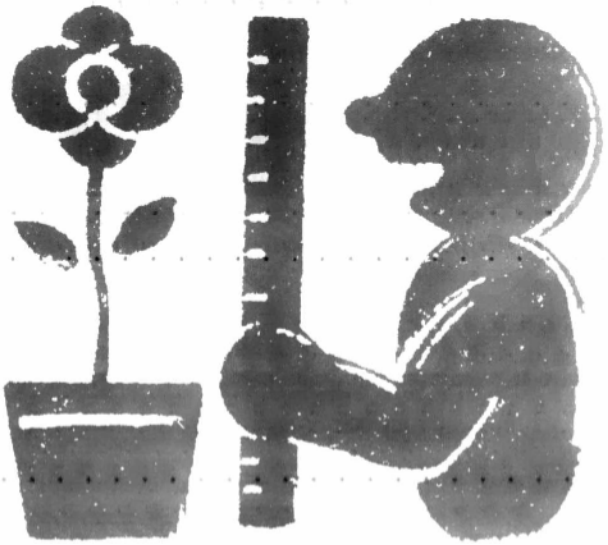
JAPANFOUNDATION 国際交流基

国際交流基金 日本語教授法シリーズ 12

ひつじ書房

学習を評価する

国際交流基金 著



JAPANFOUNDATION 国際交流基金

国際交流基金 日本語教授法シリーズ

【全14巻】

第 1 巻「日本語教師の役割／コースデザイン」

第 2 巻「音声を教える」[CD-ROM付]

第 3 巻「文字・語彙を教える」

第 4 巻「文法を教える」

第 5 巻「聞くことを教える」[CD付]

第 6 巻「話すことを教える」

第 7 巻「読むことを教える」

第 8 巻「書くことを教える」

第 9 巻「初級を教える」

第10巻「中・上級を教える」

第11巻「日本事情・日本文化を教える」

第12巻「学習を評価する」

第13巻「教え方を改善する」

第14巻「教材開発」

■はじめに

国際交流基金日本語国際センター（以下「センター」）では1989年の開設以来、海外の日本語教師のためにさまざまな研修を行ってきました。1992年には、その研修用教材として『外国人教師のための日本語教授法』を作成し、主に「海外日本語教師長期研修」の教授法の授業で使用してきました。しかし、時代の流れとともに、各国の日本語教育の状況が変化し、一方、日本語教授法に関する研究も発展したため、センターの研修の形や内容もさまざまに変化してきました。

そこで、現在センターの研修で行われている教授法授業の内容を新たにまとめ直し、今後の研修に役立て、また広く国内外の日本語教育関係のみなさまにも利用していただけるように、この教授法シリーズを出版することにしました。この教材の主な対象は、海外で日本語教育を行っている日本語を母語としない日本語教師ですが、広くそのほかの日本語教育関係者や、改めて日本語教授法を独りで学習する方々にも役立てていただけるものと考えます。また、現在教師をしている方々を対象としていますが、日本語教育経験の浅い先生からベテランの先生まで、できるだけ多くのみなさまに利用していただけるよう工夫しました。

■この教授法シリーズの目的

このシリーズでは、日本語を教えるための必要な基礎的知識を紹介するだけでなく、実際の教室で、その知識がどう生かせるのかを考えてもらうことを目的としています。

国際交流基金日本語国際センターでは、教師の基本的な姿勢として、特に次の能力を育てることを目的として研修を行ってきました。その方針はこのシリーズの中でも基本的な考え方となっています。

1）自分で考える力を養う

理論や知識を受身的に身につけるのではなく、自分で考え、理解して吸収する力を身につけることを目的とします。

2）客観性、柔軟性を養う

自分のこれまでの方法、考え方にとらわれず、ほかの教師の意見や方法を知り、客観的に理解し、時には柔軟に受け入れることのできる教師を育てることをめざします。

3）現実を見つめる視点を養う

つねに現状や与えられた環境、自分の特性や能力を客観的に正確に把握し、自分の現場に合った適切な方法を見つける姿勢を育てることをめざします。

4）将来的にも自ら成長できる姿勢を養う

研修終了後もつねに自分自身で課題を見つけ、成長しつづける自己研修型の教師を育てることをめざします。

■この教授法シリーズの構成

このシリーズは、テーマごとに独立した巻になっています。どの巻からでも学習を始めることができます。各巻のテーマと概要は以下の通りです。

第 1 巻　日本語教師の役割／コースデザイン　｝日本語を教えるうえでの全体的な問題をとりあげます。

第 2 巻　音声を教える
第 3 巻　文字・語彙を教える
第 4 巻　文法を教える
第 5 巻　聞くことを教える
第 6 巻　話すことを教える
第 7 巻　読むことを教える
第 8 巻　書くことを教える
｝各項目に関する基礎的な知識の整理をし、具体的な教え方について考えます。

第 9 巻　初級を教える
第 10 巻　中・上級を教える
｝各レベルの教え方について、総合的に考えます。

第 11 巻　日本事情・日本文化を教える
第 12 巻　学習を評価する
第 13 巻　教え方を改善する
第 14 巻　教材開発

■この巻の目的

評価の対象や目的はいろいろありますが、この巻が扱うのは、日本語学習の目標としたことをどれだけ達成したかを測る到達度評価です。到達度評価を行う方法や留意点について、具体的に紹介しています。

この巻が重要だと考えるのは次の４点です。

①教えたことを測ること：

教育が効果的に働くためには、まず、学習者の学習目標と教える内容や方法が合致していること、次に、教えたことと評価の内容や方法が合致していることが重要です。この巻は教える内容や方法を扱いませんが、読者のみなさんは、この巻で評価の内容や方法を考える際、自分が教えた内容や方法と合っているかをよく考えてください。

②目的に合った「ものさし」を使うこと：

適切な評価のためには、目的に合った「ものさし」を使うことが重要です。たとえば、学習目的の中に話す力の向上が入っているのであれば、筆記テストだけでなく、話すテストも導入するなど、評価したいものをできるだけ直接的に測ることを提案します。また、その「ものさし」を学習者にも提示することは、学習者の日常の学習に指針を与え、学習目的に合った学習方法を習慣づけることにもつながります。

③テストでは測りにくい学習の要素も評価すること：

多くの教師や学習者はテストとその結果を重視する傾向があり、テストは社会的にも大きな役割を持っています。しかし、異文化理解能力、学習意欲や努力など、テストでは測りにくい学習の側面も学習を支える重要な要素です。この巻では、ポートフォリオを通してテストでは測りにくい学習の要素も積極的に評価していくことを提案します。

④学習者の自己評価の力を育てること：

学習の評価は教師が行うだけでなく、学習者が自分自身を評価する視点を持つことが重要です。学習者が自己評価の視点を持つことは、学習者が自分に合った学習方法を探し、自分の力で学習を進めていくことにつながります。

■この巻の構成

1．全体の構成

この巻の構成は、以下のようになっています。

1．「学習を評価する」とは

誰が何のために評価を行うのか、評価はコース全体の中でどんな位置づけにあるのか、何を評価の対象にするのか、評価の方法にはどんな種類があるのかなど、基本的なことを確認します。

2．テストによる評価

テストは、学習者の知識や能力を評価するために最もよく使われる方法です。本章では、まず、テストには大きく分けてどんな種類があり、それぞれどんな特徴を持っているか確認します。そして、質のよいテストを作るために気をつけなければならない留意点を紹介します。これらを踏まえた上で、実際にテストを作成し、実施し、結果をフィードバックするまでの一連の流れを見ていきます。

3．テストによらない評価

テストでは測りにくい学習の要素を評価する方法として、ポートフォリオを紹介します。ポートフォリオにはどんな物をどのぐらい入れるのか、ポートフォリオの評価はどうするのかなどについて、具体的に考えていきます。

2．各章の構成

この巻のそれぞれの章には、次のような部分があります。

ふり返りましょう

自分自身の体験や考え方をふり返ります。

考えましょう

この巻で紹介した考え方や方法などを踏まえ、具体的に考えます。

やってみましょう

この巻で紹介した考え方や方法などを踏まえ、実際にやってみます。

整理しましょう

各章や各節で学んだことをもう一度整理します。

◆重版に際しての修正点

本書3刷の発行に際しまして、p.72-73のコラムを＜ACTFL-OPI＞から＜話す力を測るテスト＞に変更いたしました。

これは、ACTFL-OPI以外に「とよた日本語能力判定」で「聞く、話す」テストが、そして「JF日本語教育スタンダード」でロールプレイテストが公開され、話す力を測るテストに特筆すべき変化が生じたことが大きな理由です。

目　次

1 「学習を評価する」とは …… 2

1-1. 誰のための評価か …… 2
1-2. 何を目的とした評価か …… 3
1-3. どんな能力を評価するか …… 7
1-4. 評価の方法 …… 10
1-5. 学習者にとっての評価 …… 12

2 テストによる評価 …… 18

2-1. テストが測るもの …… 18
(1) 言語を知識に分解して測るテストと統合的な運用を測るテスト
(2) 実生活の言語運用に近いテスト
(3) 採点の基準
(4) テストで測れるもの・測れないもの
2-2. テスト作成の留意点 …… 25
(1) 妥当性
(2) 信頼性
(3) 真正性
(4) 学習への波及効果
2-3. テストの問題例―言語知識を測るテスト― …… 33
(1) 文字のテスト
(2) 語彙のテスト
(3) 文法のテスト
2-4. テストの問題例―統合的な運用を測るテスト― …… 46
(1) 読む力／聞く力を測るテスト
(2) 書く力／話す力を測るテスト